

長野県知的障がい福祉協会主催の「自閉症支援セミナー」や「精神科領域支援セミナー」において、特に濃密な支援を提供していないにもかかわらず、対象ケースの行動が激変してしまう事例に、一年に一つ以上必ず出会います。そんなケースに限って「どうしてこのケース、行動がこんなに変わってしまったのですか？だって3ヶ月前に比べて、もうすっかり別人じゃないですか」というスーパーバイザーの質問にレポーターが「うーん…」と答えに詰まってしまう時があって、自分たちの支援内容に無自覚過ぎるのだと、ちょっとがっかりさせられてしまうのですが…。

しかし、それには理由があります。あまりにも気がつかれ難い支援内容が故に、自覚され難いのです。

ある事例は、こんな具合です。些細なことで感情の爆発を起こし、大きな声を上げ、脅かし、時には職員に手を上げてしまうことを頻りに繰り返す方が、すっかり穏やかな方になってしまっています。「何かあったの？」の質問に「特に何もしていないのですが…」の答え。しかし、一緒になって支援を振り返ってみると、くいつも職員だけで実施していた医療相談を変更し、本人とともに通院して直接精神科ドクターとやりとりをした。その後から、穏やかな生活を送っているようなのです。＜一緒に通院して医療相談を受けた＞ことは、本人にとっては一大事だったのですが、支援者にとっては取るに足らないことだったというわけです。取るに足らないと思ったのには、その医療相談によって特に服薬内容が変化したわけではないことが背景にあります。

またある事例では、頻りに服薬時の飲水量のことでトラブルを起こしていた方が、すっかりトラブルを起こさなくなっています。この変化のきっかけは、＜担当の職員と一緒に飲水量について約束をした＞ことにありました。しかし、飲水量はコップ2分の1杯がコップ一杯にわずかに増えただけなのです。ここでも同じことが言えます。＜一緒にした約束＞

は本人にとって一大事だったのですが、コップに2分の1杯がコップ一杯になっただけの約束は、職員にとっては、さほど大きな出来事ではなかったのです。コップ二分の一杯の約束は、おそらく職員からの一方的な命令、指示で、コップ一杯の約束は、きちんとその人の言い分を聞きながら相談をした結果、双方が納得の本当の約束になっていたのでしょう。

次は、毎日のように突然泣き出したり、物を投げたりという方が、すっかり穏やかな人になってしまったという事例です。「絶対何かが無ければこのような変化は生じないはずですが、何かないですか？」と思いだして行くと、「そういえば、職員会議でもう叱るのは止めにしましょうと提案させて頂いて、その後、みんな叱らなくなっています」という結論になりました。

この三事例いずれにおいても、職員は自分たちの自己変容について考えが及んでいないのですが、いずれの事例においても良かれと思って提供していた「押しつけ」の支援から、相談を中心とした「対等」な対人関係を基盤とした支援への変化が確認できます。叱ることだって「押しつけ」「支配」です。

何十年も、いつでも、どこでも叱られ続けてきた人が、叱らない支援に出会い、ちょっとした相談をかけてくれ、自分の今まで聞いてくれなかった話を聞いてくれた時、人は変容していくのです。そして、大切なことは、その人が変容する前に必ず支援職員集団の変容があるということです。「頭ごなしに叱らないで（否定しないで）、ちゃんと言い分を（話を）聞いてみよう」と職員が変容することで、その人の行動変容が始まるのです。

いかがですか？『叱らない支援』、絶対やってみる価値がありますよ！少なくとも「自閉症支援セミナー」や「精神科領域支援セミナー」のいくつもの事例が、それを証明しています。『その人の話に耳を傾けること』そのことこそが、最初の支援なのです。